

現役引退危機から見た老年期のアイデンティティ 様態と心理社会的課題達成の特徴

岡本 祐子
(1998年9月30日受理)

An Analysis of Identity Statuses and the Characteristics of Psychosocial Tasks
in Old Age from the viewpoints of retirement crisis.

Yuko OKAMOTO

The present study was designed to investigate the identity statuses and characteristics of psychosocial tasks in old age. Data were obtained on the basis of questionnaire distributed to 83 men from 60's to 80's. The results were summarized as follows:

1) By the analysis of SCT responses, the following five types of identity after retirement were found: (A)The Active-Welcomer, (B)The Retirement-Crisis-Converted, (C)The Passive-Welcomer, (D)The Crisis-Continued, and (E)The Easily-Transferred. These five types were classified into Marcia's identity-statuses.

2) Identity achiever (A:The Active-Welcomer and B:The Retirement-Crisis-Converted) achieved psychosocial tasks in every stages better than other statuses. On the contrary, Identity diffusion (D:The Crisis-Continued) showed lower level of achievement of psychosocial tasks in comparison with the other statuses.

【Key Words】 Identity, psychosocial task, retirement, identity status, Old Age.

問題および目的

ライフサイクルの最終段階である老年期の心理社会的課題は、Erikson (1950) によれば、自我の統合である。それは、自分の人生を一回限りの代替不能のものとして肯定的に受容することを意味している。老年期を迎えた人々が、この自我の統合という課題をどのように達成し、老年期のアイデンティティを獲得しているかについては、Erikson (1986) の晩年の名著『老年期：生き生きしたかわりあい』の中に詳述されている。この著書の中でEriksonは、精神分析的個体発達分化の図式Epigenetic Schemeに示された8つの心理社会的課題が、老年期にどのように顕在化し、再達成されるかについて考察している。

老年期のアイデンティティに関する実証的研究は、1980年代以降、漸増の傾向にあり、健康度や障害・老化の程度、社会的ネットワークなどの諸要因によって、

高齢者のアイデンティティ感覚やアイデンティティ意識に相違が見られることが明らかにされている（例えば、Ainlay, 1981; Donovan, 1983; Dressel, 1987, など）。しかしながら、老年期のアイデンティティに関する研究は、成人期のアイデンティティ発達の研究とともに、いまだその途についたばかりであり、数多くの未解明の課題が残されている。特に、ライフサイクル全体を視野に入れた老年期のアイデンティティの考察は、重要な課題である。

この問題について我が国においては、岡本 (1994, 1997) による成人期のアイデンティティ発達に関する一連の研究が見られる。岡本は、青年期以降、現役引退期までのアイデンティティの発達過程を分析し、ライフサイクルの中で中年期の入り口と現役引退期には、それまでに獲得されたアイデンティティが再吟味され、再体制化されることを見出している。例えば中年期から老年期への移行期である現役引退期は、人生後期の

重要な発達の危機期であり、Table 1.のようなアイデンティティの再体制化プロセスが認められる。

このような定年退職・現役引退という発達の危機を経た後のアイデンティティ様態には、どのような特徴が見られるのであろうか。老年期のアイデンティティ様態は、定年退職危機の体験の仕方によって相違が見られるであろうか。また、それぞれのアイデンティティ様態の心理社会的課題の再達成のあり方にはどのような特徴が見られるのであろうか。このような問題について検討した老年期のアイデンティティに関する実証的研究は、現在のところ行われておらず、研究の基礎となる理論は見られない。したがって本研究は、岡本がこれまで行ってきた、青年期から成人期を通じてのアイデンティティ発達過程の分析から得られた知見を、老年期のアイデンティティ様態の分析に応用することを試みた。岡本のこれまでの研究から導き出された成人期のアイデンティティ発達に関する総合的なビジョンは、次のようなものである。

1. 成人期の発達は、人生の岐路（＝発達の危機期）に遭遇することに、これまでの自己のあり方や生活構造の破綻や破れに直面し、一時的な混乱・不安定期を経て、再び安定したアイデンティティが獲得されていく、「危機→再体制化→再生」の繰り返しのプロセスとして理解される。

2. すべての成人がアイデンティティを「達成」しているわけではなく、「発達の危機」への認知と対応の仕方によって、成人期においてもアイデンティティ拡散、予定アイデンティティ¹⁾、モラトリアムの様態も存在する。成人期の「アイデンティティ達成」の様態は、自己の直面した危機を主体的に受けとめ、納得できる自己のあり方、生き方を積極的に模索、獲得し、それ

に主体的に関与することによって、獲得される。

本研究は、このようなビジョンにもとづいて、老年期のアイデンティティ様態を仮説的にTable 2.のように設定した。老年期の「危機」の契機には、現役引退、家族、特に配偶者との死別、心身の老化や病氣など、さまざまな事象が考えられる。本研究では、その中で客観的に把握することが容易であり、外的事象としては個人差の少ない現役引退を、老年期の発達の危機の基盤となる事象としてとりあげることにした。

Table 2.の右の欄に示した「推察される定年退職認知タイプ」は、本研究の仮説的類型が、岡本・山本（1985）によって見出された定年退職認知タイプのどのタイプに対応するかを示したものである。また「アイデンティティ再体制化のパターン」は、岡本（1994）の「成人期におけるアイデンティティのラセン式発達モデル」（Figure 1.）との対応を示したものである。Iアイデンティティ達成①型は、Figure 1.のⅠに示したように、現役引退にともなうアイデンティティの混乱はそれほど大きくなく、退職後の安定したアイデンティティを再獲得していったタイプである。それに対してIIアイデンティティ達成②型は、現役引退を自己にとって危機的、否定的にとらえており、退職によるアイデンティティの揺らぎや崩壊（＝アイデンティティ拡散）→自己の見直しと退職生活への方向づけの模索（＝モラトリアム）を経て、アイデンティティの再獲得（＝アイデンティティ達成）に至ったタイプである。このタイプは、Figure 1.にⅡと示したように、現役引退危機期にラセンが大きく転回したパターンである「(A)→D→M→A」にあたる。III予定アイデンティティ型は、現役引退にともなう生き方の見直しはあいまいであるが、現在の退職生活には積極的

Table 1. 現役引退期のアイデンティティ再体制化のプロセス（岡本, 1994）

段階	内容
I	自己内外の変化の認識に伴う危機期 ・退職による生活環境の変化 （社会的地位の喪失・低下、収入・経済的基盤の喪失・低下、社会的交流の減少、無為） ↓
II	自分の再吟味と再方向づけへの模索期 ・自分の人生の見直し ・退職生活への方向づけの試み ↓
III	軌道修正・軌道転換期 ・退職後へ向けての生活、価値観などの修正 ・社会・家族との関係の変化 ↓
IV	アイデンティティの再確立期 ・自己安定感・肯定感の増大 ・精神的充足感の増大

Table 2. 老年期のアイデンティティ様態

アイデンティティ・ステータス	現役引退の受けとめ方	現在の生活に至るまでの主体的模索体験	現在の生活・活動への積極的関与	現在の生活の充足感	推察される定年退職認知タイプ ¹⁾	アイデンティティ再体制化のパターン ²⁾
I アイデンティティ達成①	肯定的	あり	あり	高い	積極的歓迎型	再体制化完了 (A)→A
II アイデンティティ達成②	否定的	あり	あり	高い	危機型	再体制化完了 (A)→D→M→A
III 予定アイデンティティ	中立的	なし/あいまい	あり	高い	受動的歓迎型	再体制化あいまい (F)→F
IV モラトリアム	アンビバレント	現在、その最中	アンビバレント/あいまい	中程度	危機型/アンビバレント型	現在、再体制化の途中 (A)→M
V アイデンティティ拡散	肯定的/否定的	なし	なし	低い	あきらめ型/逃避型	再体制化未完了/失敗 (D)→D (A)→D→D

(注1) 岡本・山本（1985）による定年退職認知タイプを示す。

(注2) 岡本（1994）による「成人期のアイデンティティのラセン式発達モデル」を示す。

A：アイデンティティ達成、M：モラトリアム、F：予定アイデンティティ、D：アイデンティティ拡散

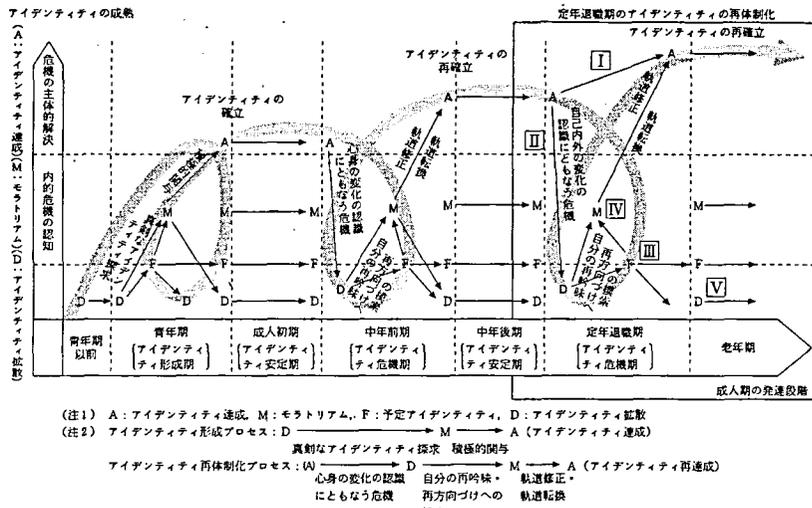


Figure 1. 「成人期におけるアイデンティティのラセン式発達モデル」と現役引退後のアイデンティティ様態への対応
 (注) □の枠内は、定年退職期のアイデンティティ再体制化のプロセスを示す。
 図中のローマ数字はそれぞれ、I アイデンティティ達成①型、II アイデンティティ達成②型、III 予定アイデンティティ型、IV モラトリアム型、V アイデンティティ拡散型を示す。

に關しており、充足感も高いタイプである。このタイプは、Figure 1. のⅢ、「F→F」のパターンに相当する。Ⅳモラトリアム型は、現在はまだ、退職生活へ向けての模索の最中であり、アイデンティティ再体制化の途上である。Ⅴアイデンティティ拡散型は、退職にともなう生き方の見直しや主体的な模索が行われておらず、しかも現在の退職生活に対しても積極的関与や充足感が乏しい。このタイプは、Figure 1. のⅤ、「D→D」、あるいは、「(A)→D→D」のパターンにあたる。特に、退職生活への再方向づけがうまくいかず、不満の高い退職生活を送っている人々は、現役引退期のアイデンティティ再体制化が失敗したパターンであると考えられる。

本研究は、以上のような仮説をもとに、老年期のアイデンティティ様態について、次のような視点から検討した。本研究の目的は、以下のとおりである。

1. 現役引退後のアイデンティティ様態を、現役引退の受けとめ方と現在の生活・活動への積極的関与の視点から分析し、その特質について検討する。
2. 各々のアイデンティティ様態に見られる心理社会的課題達成の特徴について考察する。

方 法

1. 調査対象者

F市老人大学に在籍している男性高齢者83名(年齢:60代 33名, 70代 37名, 80代 8名)。このうち81名は現役引退者である(ただし、再就職して現在も就

労している者は21.7%見られる)。残りの2名は、自営業であり、現在も就労している。

2. 手続き

以下の内容からなる質問紙を作成した。

①日常生活環境や生活構造に関する質問項目:健康状態、同居家族、子供の有無および交流の程度、現在の職業の有無、現役引退までの職業、社会活動への参加状況など、8項目。

②Eriksonの精神分析的個体発達分化の図式I~Ⅷ段階の課題達成のあり方、およびそれらのテーマの現在における表れ方に関する7ポイント・スケールの項目、30項目。これは、Eriksonの著作、中でも『老年期』に記述されているI~Ⅷ段階の各課題の表れ方を抽出して作成したものである。これらの調査項目は、各段階につき2~6項目からなり、それぞれの項目は、Table 4.に示したように肯定的な局面と否定的な局面を表す対になった文章から構成されている。

③現役引退の受けとめ方、現在の生活や活動に対する意識に関する文章完成法SCT,10項目。

調査は、1995年6~7月に、留め置き法により個別に実施した。

結果および考察

1. 老年期のアイデンティティ様態の定義と評定

アイデンティティ様態は、文章完成法SCTに対する反応内容を、Table 2.の定義にしたがって作成したマニュアルにもとづいて評定した。評定は2名の評定

者によって行い、評定一致率は81.3%であった。Table 3.は、その結果、見出された老年期のアイデンティティ様態の概要とそれぞれの人数を示したものである。なお、モラトリアム型は、本研究の対象者には見出されなかった。A積極的歓迎型は、現役引退を歓迎し肯定的にとらえており、退職生活や現在の活動にも積極的に関与していた。このタイプの人々は、現役時代のアイデンティティから退職者としてのアイデンティティへの移行が比較的、スムーズに行われたタイプである。それに対して、B退職危機転換型は、現役引退を自己にとって危機的、否定的にとらえていた。しかしこのタイプの人々は、その後、退職生活へ向けてアイデンティティの立て直しを行い、現在は、退職生活に積極的に関与し、高い充足感を獲得していた。B型と評定された人々は10名見られ、全体の12.1%を占めていたが、このタイプの人々は、現役引退期のアイデンティティ再体制化が完了した人々である。

C受動的歓迎型は、現役引退は肯定的にとらえて歓迎していたが、退職者としての新しいライフステージへむけての積極的な展望や模索は見られない。このタイプは、活力が乏しく、退職を義務からの解放と受けとめて歓迎していることが特徴である。現在の生活への関与も受動的であり、A・B型に比べるとエネルギーのレベルは低いと推察された。

また、D危機継続型は、現役引退を否定的、危機的にとらえているばかりでなく、現在の生活や活動に対

しても積極的関与が行われておらず、退職生活の充足感も低いタイプである。このタイプの人々は、現役引退危機が未解決のままであり、アイデンティティ再体制化が完了していない人々である。最後に、Eあっさり移行型は、現役引退を単なる一つの節目にとらえており、SCTの記述内容から見る限り、あっさりと次のライフステージへ移行したタイプであると推察された。このタイプの人々は、自己と自己の生活への意識や関与が乏しいことが特徴的であり、「危機に関与しない」タイプである。

全体的に、積極的であれ受動的であれ、退職を歓迎している人々（A積極的歓迎型、C受動的歓迎型）が、66.3%と過半数を占めていた。また、退職生活に充足感が高い人々（A積極的歓迎型、B退職危機転換型、C受動的歓迎型）は、全体の78.3%を占めており、本研究の対象者の大部分は、適応的な退職生活を送っていることが示唆された。

2. アイデンティティ様態と日常生活環境・生活構造との関連性

次に、これらA～Eのアイデンティティ様態と、日常生活環境・構造との関連性を検討した。まず、対象者全体の健康状態、家族形態、子供との交流の程度、社会活動への参加状況について分析したところ、本研究の対象者はほとんどが健康で、配偶者または子供家族と同居しており、80%以上が趣味や学習活動に携わっ

Table 3. 老年期のアイデンティティ様態とその概要

アイデンティティ様態	定年退職（現役引退）の受けとめ方	現在の生活・活動への関与	退職生活の充足感	人数（%）
A 積極的歓迎型 (I アイデンティティ達成①型)	退職を肯定的にとらえ、歓迎している。	積極的関与をしている。	高い	30 (36.1)
B 退職危機転換型 (II アイデンティティ達成②型)	退職を危機的、否定的にとらえている。	積極的関与をしている。	高い	10 (12.0)
C 受動的歓迎型 (III 予定アイデンティティ型)	退職を肯定的にとらえ歓迎しているが、disengagement 的。	活力・エネルギーは乏しく受動的な関与である。	中程度～高い	25 (30.1)
D 危機継続型 (V アイデンティティ拡散型)	退職を危機的、否定的にとらえている。	積極的関与はほとんど見られず、無為の生活を送っている。	低い	9 (10.8)
E あっさり移行型 (V アイデンティティ拡散型)	肯定的/否定的のいずれでもなく単なる節目として認知している。	中程度の関与	中程度	9 (10.8)
合計				83 (100.0)

ていた。また全員が何らかの家庭外のグループに所属しており、社会的ネットワークを有していた。このような心理的・物理的環境は、高齢者にとって非常に望ましいものであり、老年期の精神的充足感形成を促進する要因を検討した岡本（1995）の研究結果と比較しても、本研究の対象者はかなり恵まれた心理的・物理的環境にあると推察された。

また、上記の各項目をアイデンティティ様態別に分析したところ、対象者の日常生活構造や環境は、A～Eの各様態によってそれほど大きな相違は見られなかった。この結果より、老年期のアイデンティティ様態は、上記のような物理的・社会的な生活環境の要因をこえた、より内的な要因によって決定されるものであると考えられる。

3. 各々のアイデンティティ様態の心理社会的課題達成の特徴

次に、アイデンティティ様態別にI～VIII段階の心理社会的課題の達成の仕方について分析した。Table 4.は、VIII～I段階のそれぞれの項目別の得点を示したものである。それぞれの得点について、タイプの要因に関する一要因分散分析を行った結果、いずれの得点においても有意な主効果が認められた。そこでt検定を行った結果、Table 4.の右欄に示した各項目の得点に有意差が認められた。それぞれの得点の高い方が、各項目の課題を肯定的に体験・意識していることを示している。表に示したように、A積極的歓迎型が全般的に高い得点を示し、どの段階においても、それぞれの課題がよく達成されていた。反対に、D危機継続型は、全般的にどの段階においても得点が低いことが特徴的であった。

また、A～Eの5つの様態の中で、A積極的歓迎型とB退職危機転換型が、非常によく類似したプロフィールを示していることは注目される。この2つの様態は、現役引退にともなうアイデンティティの再体制化が完了し、退職者としてのアイデンティティをうまく再確立した人々である。彼らは、現在の生活や活動に積極的に関与しており、高い充足感を獲得していた。特にB退職危機転換型の人々が、現役引退までの仕事に対して非常にやりがいを感じ、積極的にうちこんでやってきたことは、項目VII-②の得点が5つのタイプの中で最も高いことにも表れている。B型の人々にとって現役引退は大きな危機であったことはこの反応からも推察されるが、このタイプの人々は、「私の生活を考えると私は、今なんで生きているのか、理由がはっきりしている」（V-②）、「私は生活の中で、自分のすべきことや役割がはっきりわかっている」（V-③）

という項目に高得点を示しており、現在の自分に対してははっきりとしたアイデンティティ感覚を獲得している。またA・B型とも、「今までの私の人生は、大変意義深い価値あるものだった」（VIII-①）、「私の毎日の仕事や活動は私に、大きな喜びや満足を与えてくれる」（VII-①）、「私は生活の中に見出している目標について、目標の実現に向かって着々と進んできた」（VII-⑥）にも高得点を示しており、「人生の受容」という老年期の心理社会的課題をうまく達成できていることが推察された。

またこれらのタイプの人々は、青年期のアイデンティティ形成以前のライフステージにおいても、自己に対する自信や有能感（IV-①、IV-③）、現在の生活や今までの生き方に対する主体性（III-①、III-③）、周囲と自分との調和（II-②）、自分のよりどころがあることの自覚（I-③）など、アイデンティティ達成の基盤となる課題やテーマに対しても、肯定的に認識しており、それらの課題がうまく達成されていることが推察された。

以上のように、本研究で設定した心理社会的課題に関する30項目のうち、VII-⑤の「若い頃の目標の実現」を除いて、他の項目はすべてアイデンティティ達成度の高い様態が、より低い様態よりも高い得点を示しており、これらの課題をよく達成していることが示唆された。

4. 全体的考察と今後の課題

以上の結果を総合すると、老年期のアイデンティティも、発達の危機に対する認知と対応によって特徴的な様態が見られ、「アイデンティティ達成」の様態は、各ライフステージの心理社会的課題が老年期においてもよく達成されていることが示唆された。Erikson（1986）は、高齢者のアイデンティティを支えている意識や感覚として、幸福な人生であったという実感（ステージVIII、以下同様）、これまでやりとげてきた仕事や子供や孫が立派に育っているという意識（VII）、配偶者をはじめ、親しい人々との交わり（VI）、何らかの仕事や業に熟達している（いた）こと（IV）、人生の目標の達成感（III）、人に頼らず、できる限り自律／自立できているという感覚（II）、自己、および神仏を含む他者に対する信頼感（I）という、それぞれのライフステージの心理社会的テーマの達成感や、それらに対する肯定的な認識を指摘している。本研究において、それらの各テーマをより具体的な内容に表現して検討したところ、Table 4.に示したように、ほぼすべてのライフステージにおいて、アイデンティティ達成との関連性が認められた。これらの結果を総

Table 4. アイデンティティ様態別に見た心理社会的課題の達成度

項目	得点	様態間の平均値の差の検定
VIII 人生の統合 対 絶望		
①今までの私の人生は：	大変意義深い価値あるものだった。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	失敗や悔いの連続であった。 A>D* B>D* C>D*
②もし生まれ変わるものなら：	今のような人生を送りたい。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	n.s.
③職業や結婚など、これまで私がやってきた重要な決断や選択は：	成功であり満足している。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	n.s.
④死に対して私は：	十分心の準備ができており恐れはない。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	n.s.
⑤私が死んだ後、子供・孫たちや社会は：	しっかり発展していくであろうと信頼している。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	n.s.
VII 世代性 対 停滞		
①私の毎日の仕事や活動は、私に：	大きな喜びや満足を与えてくれる。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	A>C・D・E** B>C・D**
②定年退職（現役引退）までの私の仕事は：	非常にやりがいのあるもので積極的に打ち込んでやっていた。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	n.s.
③子供を育てることは私にとって：	非常にやりがいのあるもので、一生懸命やってきた。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	n.s.
④子育てに対して私は：	常に心をくわいて一生懸命やってきた。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	n.s.
⑤私は若い頃からやろうとしてきたことを：	かなり実現できた。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	C・D・E>A** C・D・E>B**
⑥私は生活の中に見出している目標について：	目標の実現に向かって着々と進んできた。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	A>C・D** B>C・D・E** C・E>D*
VI 親密性 対 孤立		
①妻（夫）と私は：	互いによく理解し合い助け合って暮らしてきた。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	n.s.
②私は、夫婦関係に：	大変満足している（いた）。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	n.s.
③もし生まれ変わるものなら：	同じ妻（夫）ともう一度夫婦でありたい。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	n.s.
④私は友人や知人と：	いつも親しくつきあい満足している。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	n.s.
V アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散		
①生きることに私は：	非常にはっきりした目標や目的をもっている。 7...6...●○5▲4...■3...2...1	A>C・ A>E・

Table 4. アイデンティティ様態別に見た心理社会的課題の達成度(cont' d)

項目	得点	様態間の平均値の差の検定
②私の生活を考えると私は： 今なんて生きているのか、理由がはっきりしている。	7.....●.....▲.....■.....3.....2.....1	何のために生きているのかわからない。 A>C・D・E** B>C・D**
③私は生活の中で： 自分のすべきことや役割がはっきりわかっている。	7.....○.....▲.....■.....3.....2.....1	何をしたらよいのかわからない。 A>C・D・E** B>C・D**
④私は現在やっている活動や役割に対して： 積極的に一生懸命打ち込んでやっている。	7.....●.....○.....▲.....■.....3.....2.....1	全く消極的である。 A>C・D・E**
IV 勤勉性 対 劣等感		
①私は： 非常に役に立つ有能な人間であると思う。	7.....6.....●.....5.....▲.....■.....3.....2.....1	全く役に立たない人間であると思う。 A>C・D・E** B>C>D*
②何か1つの課題やも のこをやりとげることは、私にとって： 大きな喜びであり生きがいである。	7.....○.....▲.....■.....4.....3.....2.....1	大変な苦痛である。 A>C・E** B>C**
③自分でやろうとすることは： すべてうまくいくと思う。	7.....6.....●.....5.....○.....▲.....■.....3.....2.....1	うまくいく自信が全くない。 A>B・C・D・E** B・C・E>D**
III 自主性 対 罪悪感		
①私は毎日の生活や活動を： 自分自身で考え、主体的に行動している。	7.....●.....○.....▲.....■.....3.....2.....1	まったくゆきまかせてある。 A>C・D・E** B>C・D**
②私は自分の育ちについて： 大変恵まれていたと誇りに感じている。	7.....6.....●.....○.....▲.....■.....3.....2.....1	思いどおりにならないことが多く、不幸であった。 n.s.
③今までの私の生き方は： 自分で主体的に考え決断してきたものだった。	7.....6.....●.....○.....▲.....■.....3.....2.....1	外部の事情や状況に流された受動的なものだった。 A>C*
II 自律性 対 恥・疑惑		
①私は毎日、生活するのに必要なことを： 家族や他の手をわずらわせず、すべて自分でやっている。	7.....6.....●.....○.....▲.....■.....3.....2.....1	すべて家族や他者に世話してもらっている。 n.s.
②今までの生活から見ると、世の中は： 私の生き方にびつたりしている。	7.....6.....●.....○.....▲.....■.....3.....2.....1	私には全く住みにくい。 A>C・D・E* B>C・D・E*
I 基本的信頼感 対 基本的不信		
①私は家族や友人を： かけがえのない人と思って信頼している。	7.....●.....○.....▲.....■.....5.....4.....3.....2.....1	あまり信頼できないと思っている。 n.s.
②私のこれからの人生は： 最良のものであろう。	7.....●.....○.....▲.....■.....5.....4.....3.....2.....1	明るい見通しが全くもてない。 A>C* E>C*
③私は： 自分のよりどころや支えになるものを失っ たりもっている。	7.....●.....○.....▲.....■.....5.....4.....3.....2.....1	何も支えがなくて不安でたまらない。 A>C・D・E** B・C・E>D*

- A 積極的歓迎型
- B 退職危機転換型
- ▲-----▲ C 受動的歓迎型
- D 危機継続型
- △-----△ E あっさり移行型

* p < .05, ** p < .01

合すると、老年期のアイデンティティは、これまでの人生の各々のライフステージにおける心理社会的テーマが再吟味され、それらが統合された姿としてとらえることができると思われる。

長寿化の進んだ今日、60代以降の現役引退後の時期は、これまでの義務や責任から解放されて、本当に自分らしい生き方を求める人々が増加している。そして心身共に元気な高齢者の多い今日では、退職後の人生は単なる楽隠居ではなく、第2の自己実現をめざす時期ととらえている人々も多い。このような人々にとって、老年期の「人生の統合」という課題は、より積極的な特質や意味合いをもっていると考えられる。本研究の調査の一部であるSCT「私が一生のうちにやりたいことは」、「定年退職（現役引退）後、私は」に対しても、「本当に自分らしい生き方がしたい」「これまでは仕事が忙しくてできなかった地域の人々の世話をしたい」「若い人々の世話をして暮らしたい」などの記述がかなり見られた。これらは、老年期という人生のラストステージにおいて、これまでのやり残した課題を実践することやこれまで生きられなかった「本当の自分」を獲得することへの願望が現れている。

中年期の入り口や現役引退期のアイデンティティの危機期には、これまでの生き方や自己のあり方の納得できないところを再吟味することによって、アイデンティティが再体制化されていく。上記の記述内容にも、過去においてやり残した課題や影になっていた自分、欠落していた生き方に光をあてて、これからの生き方に統合していきたいという気持ちが反映されていると思われる。これらは、「人生の統合」という老年期の課題のより積極的な達成の仕方であろう。このような「人生の統合」のあり方は、高齢者が精神的に充足した晩年を送るためにも、きわめて大きな示唆を与えている。このようなより積極的な「人生の統合」のあり方の考察は、今後の重要な課題であると考えられる。

<注>

- 1) 原語は、Foreclosureである。これは「早期完了」と翻訳されている場合が多いが、本研究では、鑑(1990)を参照して意識し、「予定アイデンティティ」という訳語をあてた。

文 献

Ainlay, S.C. 1981 Intentionality, identity and aging: An inquiry into aging and adventitious vision loss. Dissertation Abstracts International,

42 (4 -A), 1810.

Donovan, D.C. 1983 Determining of sex role identity in older adults. Dissertation Abstracts International, 44 (2-B), 604.

Dressel, E.T. 1987 To be 'old' or not to be 'old': Exploring lifestyle variations and their implications for age identity. Dissertation Abstracts International, 47 (10 -A), 3846-3847.

Erikson, E.H. 1950 Childhood and Society. New York: W.W.Norton. (仁科弥生訳 1977, 1980 幼児期と社会 1,2. 東京:みすず書房)

Erikson, E.H., Erikson, J.M., & Kivnik, H.Q. 1986 Vital Involvement in Old Age. New York: W.W.Norton. (朝長正徳訳 1990 老年期: 生き生きしたかかわりあい. 東京:みすず書房)

岡本祐子 1994 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究. 東京: 風間書房.

岡本祐子 1995 高齢期の精神的充足感形成に関する研究(第1報): 高齢者の精神的充足感獲得と生活の満足度および主体的欲求との関連性. 日本家政学会誌, 46, 923-932.

岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学. 京都: ナカニシヤ出版.

岡本祐子・山本多喜司 1985 定年退職期の自我同一性に関する研究. 教育心理学研究, 33, 185-194.

鎌幹八郎 1990 アイデンティティの心理学. 講談社現代新書.